

## 〈報告〉

## 高校運動部員の道徳判断と対人関係発達に関連について

五十嵐 辰也\*・中島 宣行\*

Relationship between Moral Judgment of High School Athletes  
and Relations Development

Tatsuya IGARASHI\* and Nobuyuki NAKAJIMA\*

## 1. 緒 言

本研究は、高校運動部員の道徳判断の発達に着目した研究である。道徳判断とは、Kohlberg<sup>1)</sup>が道徳性発達理論として提唱したものであり、「道徳性の判断の形式であり、その人の価値の決定の仕方や道徳的規範、価値の捉え方に着目し、「～はやるべきではない」と考える理由、根拠を分析することによって明らかにされるものである。」と定義される。

このKohlbergの道徳判断を用い、スポーツ選手の道徳判断の発達を見た研究は、欧米で多く行なわれているが、スポーツ活動特有の指導者と選手の密な関係と道徳判断の関連は、まだ明らかにされていない。スポーツ活動が、子どもの人格形成を促し、道徳性の育成に寄与するならば、指導者やチームメイトといった親以外の重要な他者との関係が道徳判断の発達とどのように関連しているのか明らかにすることは、非常に意義のあることだと考える。

しかし、親以外の重要な他者との関係は、親との依存-独立の葛藤<sup>2)</sup>を経験し、心理的離乳<sup>3)</sup>と呼ばれる親からの心理的自立を果たさなくては、適切な関係作りは行いづらいとされている。

よって、本研究の目的は、高校運動部員の道徳判断と、親との依存-独立の葛藤を果たし、重要な他者との関係作りを行っていく一連の過程である対人関係発達との関連を明らかにすることである。また、指導者からの影響を部員1人ひとりの視点から把握するために、「自分(影響者)の望むように他

者(被影響者)の意見・態度・行動を変化させることのできる能力」である社会的勢力<sup>4)</sup>を用いて、道徳判断の発達にどのような勢力が影響を与えているのかも明らかにする。

## 2. 方 法

本研究は研究1と研究2の2回に分けて研究した。研究1では、平成20年5月から6月に高校運動部員301名(年齢範囲15-18歳, M=16.5, SD=0.64)を対象に質問紙調査を行い、研究2で用いる尺度の信頼性と妥当性が確認された。

研究2では、平成20年6月から7月に高校運動部員294名(年齢範囲15-18歳, M=16.5, SD=0.63)を対象に研究1で作成した尺度に、道徳判断質問紙DIT日本版を加えて質問紙調査を行い、高校運動部員の道徳判断と対人関係発達の関連を検討した。また、道徳判断に与える、対人関係発達と社会的勢力の影響も検討した。

## 3. 結 果

まず、親との依存-独立の葛藤と指導者やチームメイトといった重要な他者への信頼感の2要因における各群間の道徳判断得点DP値の差の検定を、2要因の分散分析で行った結果、DP値に対して重要な他者への信頼感に主効果が確認された。一方、親との依存-独立の葛藤には主効果は確認されなかったが、交互作用は確認された。

そこで、交互作用が顕著に見られた、低依存・高独立群への「指導者・友人への信頼感」の単純主効果を見てみると、指導者と友人への信頼感が共に高い群と、指導者への信頼感が高く・友人への信頼感

\* 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科  
Graduate School of Health and Sports Science,  
Juntendo University

が低い群が比較的高い値を示し、指導者と友人への信頼感が共に低い群が、最も低い値を示した。そして、Tukeyの多重比較を行った結果、それぞれに1%水準、0.1%水準で有意な差が確認された。

次に、フェイスシート上で問うた重要な他者を、監督とチームメイトとした各群に対し、対人関係発達の4要因、指導者の社会的勢力4因子の計8因子をDP値を説明する要因とした重回帰分析を行なった。監督を重要な他者とする部員は、「正当勢力」と「指導意欲勢力」に5%水準で有意な正の係数が示され、「親からの独立欲求」は、5%水準で負の係数が示された。また、部活の友人を重要な他者とした部員は、「友人への信頼感」が1%水準、「専門勢力」が5%水準で有意な正の係数が示された。

罰勢力に関しては、誰を重要な他者としようと、部員の道徳判断に影響を与えていなかった。

#### 4. 考 察

まず、低依存・高独立群への「指導者・友人への信頼感」の単純主効果の結果によると、低依存・高独立とは親との心理的離乳を果たした状態であると解釈でき、なおかつ重要な他者への信頼感が高いほど、道徳判断の値も高くなるということから、親から自立できている部員にとっては、部活動の重要な他者との関わりが、道徳判断の発達に寄与している可能性が示唆された。これにより、自我発達と道徳判断に関連性があることが確認されたため、逆に親との依存-独立の葛藤を適切に処理できていない部員は、部活動内の対人関係より、まず親からの自立を促すことを優先した方が良いであろう。しかし、先行研究では重要な他者の存在が親からの自立を促すことが報告されているため、指導者からのアプローチも自我発達に必要であると考えられる。いずれにしても、道徳判断の発達には、親との依存-独立の葛藤を克服しているのかどうか前提条件となることが示唆された。

また、高校運動部員の道徳判断の発達に、対人関係発達と指導者の社会的勢力の与える影響をみると、重要な他者を監督とした部員に関しては、「正当勢力」と「指導意欲勢力」の影響が強く、部活動内での監督との指導享受関係が適切に形成されており、監督の権威性を受け入れやすくなっている状態と考えられる。実際の指導では、監督の権威を示し、熱意を込めた指導を行っていくことが、部員の道徳判断の発達を促す要因であることが示唆され

た。重要な他者を部活の友人とした部員に関しては、「友人への信頼感」と「専門勢力」の影響が強いため、部活の組織運営は仲間同士で行い、指導者には競技の専門的なところを指導してもらうというスタンスが、道徳判断の発達を促す環境を生み出していると考えられる。

また、重要な他者を誰にしていようと、罰勢力は部員の道徳判断に影響は与えていなかったが、先行研究では罰勢力は性格特性によって影響が異なってくるという報告がされているため、本研究で用いた以外の性格特性を考慮した変数により、再度検討しなおす必要がある。

#### 5. 結 論

本研究の結果から、以下の結論が得られた。

- (1) 低依存・高独立群において、指導者や友人への信頼感が高い方が、部員の道徳判断も高くなるということが明らかになった。
- (2) 重要な他者を監督とする部員には、「正当勢力」と「指導意欲勢力」が部員の道徳判断に影響を与えていることが明らかになった。
- (3) 重要な他者を部活の友人とする部員には、「友人への信頼感」と「専門勢力」が部員の道徳判断に影響を与えていることが明らかになった。
- (4) 罰勢力に関しては、誰を重要な他者としようと、部員の道徳判断に影響を与えなかった。

(当論文は、平成20年度順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科の修士論文を基に作成されたものである)

#### 参 考 文 献

- 1) Kohlberg, L.: Stage and sequence: The cognitive developmental approach to socialization. In Goslin, D. A. (ed.), Handbook of socialization: Theory and research, Rand McNally, 347-480, (1969)
- 2) 井上忠典: 大学生における親との依存-独立の葛藤と自我同一性の関連について. 筑波大学心理学研究, 17, 163-173, (1995)
- 3) Hollingworth, L. S.: The psychology of the adolescent. New York: Appleton, (1928)
- 4) 今井芳昭: 影響者が保持する社会的勢力の認知と被影響者の認知・影響者に対する満足度との関係. 実験社会心理学研究, 26, 163-173, (1987)

(平成21年3月31日 受付)  
(平成21年3月31日 受理)